

日本化学会は、国際交流を活動の柱の1つとしており、国際的な連携、特にアジア諸国との連携を強化するという方針のもとに活動を行っている。ここに最近のトピックスを紹介する。

暑い厦門で熱い交流を —中国化学会年会を訪問—

昨年3月に締結した中国化学会との国際協力協定の合意(本誌62巻6号)に基づいて、中国化学会の年会に岩澤会長とともに出席し、様々な交流を行った。

協定書において、次世代の化学者がお互いの理解を深め個人的な関係を築きさらに将来の日中のネットワークの基盤を作るために、特定のテーマのもとに少人数でフォーラムを行うこと、会長が年会に限らず機会があるときに相互訪問することを定めている。議論を重ねた結果、本年6月に開催された中国化学会年会で、第1回日中若手化学者フォーラムを開催することに合意した。



写真1 第1回日中フォーラムの参加者

日本側リーダー・九州大学吾郷浩樹准教授に、メンバー選出、プログラム編成、中国側リーダーとの交渉、さらに旅行の手配まできめ細やかに取り組んでいた。

中国化学会は、偶数年に年会を開催しており、今年は6月20日～23日に福建省厦門^{アモイ}大学で開催された。厦門は景勝地として知られると同時に、海沿い南部に位置し日本の真夏以上の高温多湿な場所である。年会登録者数は約4千人と日

本化学会年会の半分以下の規模であるが、大学の講堂で開催されたオープニングセレモニーに2,600名が出席した様子は、気候と相まって熱気にあふれ壮観であった。また、壇上には、中国だけではなく、米国、英国、ドイツ、

マレーシア、タイなど諸外国の化学会幹部が勢ぞろいし、華やかであった。日本化学会からは、高橋保国際交流委員長・北海道大学教授が登壇した。会期中、各国化学会と中国化学会とのフォーラム、共同シンポジウム、二国間協力協定締結式(米国、英国)、食事会や、欧州化学企業とのシンポジウムがスケジュールに組み込まれており、産業界だけでなく、学会も中国のパワーをリスペクトし、中国戦略を重要視していると感じた。

第1回日中若手化学者フォーラム

標記フォーラムは、中国化学会の年会の1つのセッションとして、日本と中国の双方から10名ずつ参加して、「低次元ナノカーボン材料」をテーマとして2日間開催された。中国側は北京大学のJin Zhang教授、日本側は筆者がチャーとして、自国のナノカーボンの第一線で活躍している若手研究者に参加を依頼した。同フォーラムでは、発表時間10分に対して質疑応答を15分と長めにしてディスカッションを中心とし、できるだけインフォーマルな雰囲気になるように進めた。テーマをナノカーボンに絞ったこと、日中ともに第一線の研究者に参加いただいたこと、全員で1つの大きなテーブルを囲んで話せる程度の人数と会場だったことなどから、議論が大いに盛り上がり、夕食の時間に間に合なくなるほどだった。日本からの出席者は(発表順で)、吾郷浩樹(九大)、Don Futaba(AIST)、田中丈士(AIST)、前田 優(東学芸大)、白石誠司(阪大)、高井和之(東工大)、藤ヶ谷剛彦(九大)、北浦 良(名大)、村田靖次郎(京大)、松尾 豊(東大)。

日本はフラレン、ナノチューブ、グラフェンと幅広く研究しているのに対して、中国は新たな分野であるグラフェンに積極的に注力し、比較的应用を意識して研究を進めている様子を感じられた。発表内容としては、グラフェンでは、金属からの析出を利用した形

状や層数の制御、ラマン分光等による物性測定、そして透明電極、センサー、スピントロニクス、複合材料などへの応用研究が紹介された。ナノチューブでは垂直・水平配向成長や気相流動による大量合成、最近大きな進展が見られている金属-半導体分離技術、そしてナノチューブの紡糸化、筒の内部空間への金属の導入や触媒反応、燃料電池などへの応用展開が報告された。フラレンについては有機化学を駆使した分子内包や太陽電池応用が紹介された。

中国のほとんどの参加者が欧米に1年以上滞在した経験を有し、英語によるコミュニケーション能力が高いことや、女性参加者の割合が10名中3名と高かった(日本側は0名)ことが印象的であった。また、中国の研究者はインパクトファクターの高いジャーナルに積極的に論文発表する傾向が見られ、日本の参加者にとって大きな刺激となった。

2日目の午後にはコロンス島へのエクスカージョンや、中国化学会のナノケミストリーのセッションとの合同懇親会を行い、中国式の乾杯も楽しみながら交流を深めることができた。今後に向けたよい第一歩になったと思う(写真1)。

<http://www.chemistry.or.jp/international/index.html>

[吾郷浩樹(九州大学先端物質化学研究所)]



写真2 中国化学会との昼食会

日本は、若手化学者フォーラムに加え、岩澤会長の招待講演、同時開催されたFACSの役員会への出席（高橋保国際交流委員長、鈴木教之 FACS Newsletter 編集委員長・上智大学准教授）などプレゼンスを示すことができた。中国化学会主催の昼食会では、白春礼会長、昨年中国化学会訪日団の団長を務めた王基銘副会長、Zhongfan Liu 北京大学教授をはじめ、中国化学会の幹部が勢ぞろいし歓迎していただいた（写真2）。岩澤会長より第1回フォーラムが成功裏に開催できたことを感謝し、両者で今後も継続し、定着させるために協力することを約束した。来年は、日本化学会の第91春季年

会で開催することとなった。

日英の関係をより広く・より深く —日英化学会協力協定書締結—

これまで、英国王立化学会（Royal Society of Chemistry : RSC）と日本化学会は、グリーンサステナブルケミストリーの共同シンポジウムの開催（2007年：関西大学、2008年：Belfast）やPCCP賞授与などの交流を続けてきた。今回、7月15日、16日の両日に、次世代を担う若手・中堅研究者7名ずつの招待講演者によるシンポジウムを開催した。

今後も良好な関係を続けるとともに、具体的な活動検討のためのベースとして両国化学会間の協力協定締結に至った。シンポジウム開催初日のレセプション会場で、シンポジウム参加者、来賓（新井知彦・日本大使館1等書記官、関口健・学振ロンドン研究連絡センター副センター長）が見守る中、David Garner 英国王立化学会前会長と岩澤会長が協定書に署名した。英国の伝統に基づいて、署名に



写真3 日英協定書締結後のコインの交換



写真4 RSC本部前での招待講演者

あたり両化学会会長が1ポンド硬貨交換を行い、セレモニーを締めくくった。今後、協定に従って、両者にとってメリットのある具体的な活動案を詰めていくことになる。まず、次回共同シンポジウムを、来年の第91春季年会で開催することを決められた（写真3）。

RSC-CSJ Joint Symposium 報告

RSC-CSJ Joint Symposium は7月15日と16日の2日間、RSCの本部があるBurlington Houseにて行われた。ここは地下鉄のPiccadilly CircusとGreen Parkのちょうど中間に位置し、周辺にMayfair、バッキンガム宮殿などの観光スポットを備えるまさにロンドンの中心街にある。美術館と併設され、昼時には中庭でお茶やランチを楽しむ人々で賑わう市民の憩いの場でもある。FaradayやDaltonらの胸像が並ぶ廊下を通過して建物の2階に向かうと、四方に書架が配置された図書館の中央に100名分の椅子が並べられた講演会場が用意されていた。ここは最近改装され、市民向け講座等にも幅広く使われているそうである。Catalysis for Sustainable Worldと題されたこの講演会では、会場の100名ほどの椅子席はすでに予約で一杯であり、関心の高さを物語っていた。

始めに日本化学会を代表して岩澤会長から挨拶があり、日本化学会の概要と将来展望を紹介された。続いてRSCのRichard Pike 常務理事が、RSCが力を入れる出版事業に対して熱弁をふるわれた。講

演会では均一・不均一触媒分野の研究者として、日本側からは薩摩篤（名大）、片田直伸（鳥取大）、唯美津木（分子研）、佐藤一彦（AIST）、富重圭一（東北大）、宍戸哲也（京大）、熊谷直哉（東大）が招待講演を行った。詳細は紙面の都合で省略するが、バイオマスやCO₂などの再生可能資源による燃料、化成品、高分子の合成、高難度な触媒反応を可能とするナノレベルのクラスターやポーラス材料の設計、光酸化反応、過酸化水素を酸化剤とするグリーンな酸化反応、原子効率の高い不斉合成、既存の化学プロセスの低温・低圧化などに関する発表が行われ、各研究者からのレベルの高い研究成果に活発な議論が行われた。またランチの時間には20件のポスター発表が行われ、日本と英国から各2件の優秀発表者（柳次智（分子研）、高祖修一（筑波大））が選出された。このSymposiumは来年以降も様々な分野での日英の交流を深めるため、テーマを変えながら継続して開催される予定である（写真4）。

http://www1.chemistry.or.jp/international/RSC-CSJ_JointSymp.html

〔薩摩 篤（名古屋大学工学研究科）〕

これからの活動

化学会の国際交流活動は、いよいよ間近に迫った12月のPACIFICHEM2010、成功裏に閉会した7月の第42回国際化学オリンピックに続く化学の普及行事と位置づける世界化学年2011が控えている。また、来年の春季年会では、今回紹介した中国との第2回若手化学者フォー

ラム、英国との共同シンポジウム、第5回目となるアジア国際シンポジウムを開催する予定であり、年会の国際化が着実に進んでいる。さらに、9月には、第14回ACC（アジア化学会議）がタイで開催され、日本からの参加者が増えるように国際交流委員会が関係委員会・ディビジョンに働きかけている。

化学会の国際交流は、これまで個別の

先生方の活躍に負うところが大きかったように思われる。これからは、これらの活動に加えて我が国の産業界の海外でのプレゼンスから力を借りながら、学会という組織として、存在感を向上させるための具体的な活動を実施していきたいと考えている。

© 2010 The Chemical Society of Japan